

## 広島高速グラインドマローの女

広島バスセンターは百万都市のターミナルにふさわしく活気に満ちている。しかし、松江までの三時間の長い旅路を想うと、憂鬱の影が忍び寄る。

やがて松江行きのバスが入ってくる。予約した席は前方窓際。乗り込んでその辺りに目をやると、妙齢の女性と目が合った。そうか隣は女性なんだ！そのお隣さんは決して若くはないが、お年を召しているわけでもない。趣味のいい薄手のセーターにグレイのパンツ。若い頃なら素敵な女性の隣というのは、心弾むものがあつたろうが、この年になると狭いバスの中、肘や肩が触れないよう身を固くするのは、苦痛でしかない。全くもって面倒なことになった。

バスはゆっくりと車体を揺らしながら発車した。驚いたことにまだ広島市内を走っているのに、隣の女性は舟をこぎ始めたではないか。首が徐々に前に傾いて、危ないと

思った瞬間元に戻る。仮にも男が隣にいるのに、無防備に寝姿を晒すとはなんとという大胆さ。と思っていると、今度は首がこちらの方に傾いてきた。やばい！彼女の頭が私の肩に乘っかりそうだ！緊張した瞬間、頭は何事もなかったように元の位置に戻った。

私がこんなに気を使っているのに、何たる振る舞い。無性に腹が立ってきたが、その時ハタと気が付いた。そうか彼女は私を「男」と思っていないのだ。ただの「爺」か「狸の置物」ぐらいにしか見てないのだ。なるほど！そっちがその気なら、こちらも遠慮はいらない。私は緊張の糸をほぐくと深い眠りに落ちた。道中私の体の一部が彼女に触れたか否かは定かではない。